

KEIEITAN ボランティア隊震災復興ボランティア活動報告

Volunteer Activities by Students of Nagoya Management Junior College in Tsunami-Devastated Area in Japan

近藤 城史
Narihito Kondo

渡部 琢也
Takuya Watanabe

目次

- I. はじめに
 - II. 活動内容
 - 1. 震災復興ボランティア実施日
 - 2. 参加者
 - 3. 事前学習
 - 4. 事後報告
 - III. 活動詳細
 - 1. 被災者手記
 - 2. 旭労災病院震災派遣事業報告
 - 3. シュシュ作成&菊武夏まつりフリーマーケット
 - 4. 先発隊出発
 - 5. 豊間中学校&オープンキャンパスでの遠隔地中継
 - 6. 中之作プロジェクト
 - 7. 後発隊出発
 - 8. 宮城教育大学学生との意見交換会
 - 9. ひまわり集会所訪問
 - 10. 松島第二幼稚園見学
 - 11. 菊華高校文化祭&オープンキャンパスでの活動報告
 - 12. ボランティア報告会
 - 13. クリスマスプレゼント作成
 - 14. 学会発表
 - IV. ボランティア活動を終えて
- 引用文献

I. はじめに

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分に東日本大震災が発生し、日本は未曾有の大災害に見舞われた。今回の震災では地震だけでなく津波によって多くの方々が犠牲となり、また、原子力発電所も震災に見舞われ依然として放射能への不安な状況が続いている。名古屋経営短期大学が所在している東海地域も以前から大規模な地震が発生する可能性が高いと言われ続けている地域であり、いつ発生してもおかしくない状況が続いているとされている。我々は本学がこのような地域に立地していることを踏まえ、学生だけにとどまらず、教職員も含めて今回の大震災を学び、経験として受け継がなければならないと考えている。そこで尾張旭ロータリークラブ(以下、尾張旭 RC)^[1] とも連携し、学習目的も含んだ、KEIEITAN ボランティア隊^[2]の活動を実施した。

II. 活動内容

1. 震災復興ボランティア実施日

後発隊：平成 24 年 9 月 9 日(日)～13 日(木)の 4 泊 5 日（車中 2 泊）

宮城県仙台市および松島町

グリーントウンやもと応急仮設住宅 ひまわり集会所（東松島市）^[3]：健康タ
オルの寄付、音楽教室見学

松島第二幼稚園（松島町）：保育見学（コーディネーショントレーニング）

宿泊先：松島温泉 ホテル絶景の館^[4]

先発隊：平成 24 年 9 月 7 日(金)～9 日(日)

福島県いわき市

震災復興ボランティア：中之作プロジェクト^[5]

宿泊先：古滝屋（いわき湯本温泉）^[6]

2. 参加者

学生 14 名（男子 2 名、女子 12 名）+引率教員 2 名（男性 2 名）

総合ビジネス学科 2 年 2 名、1 年 3 名、子ども学科 1 年 3 名、健康福祉学科 1 年 6 名

計 16 名

3. 事前学習

旭労災病院震災派遣事業報告

被災者手記

菊武夏まつりでのフリーマーケットおよび、手作りシュシュの作成と販売

4. 事後報告

平成 24 年 11 月 17 日(土) 菊武学園文化センター大ホールにて報告会を実施

平成 24 年 1 月 5 日(土) 日本ビジネス実務学会

平成 24 年度中部ブロック研究会において、

「KEIEITAN 震災復興ボランティア隊活動報告 2012

—東日本大震災被災者から学んだこと—

代田明日香 優秀賞受賞

「直してみんかプロジェクト」に参加して —古民家再生土壁づくりボランティア—

菅沼賀代、早川結衣 奨励賞受賞

III. 活動詳細

1. 被災者手記

事前学習として 6/21(木)に、福島県いわき市で被災された元いわき市立豊間中学校教諭小野覚久先生（現小名浜第一中学校教諭）の手記と写真を用いて行った。豊間中学校はいわき市の海岸に面した中学校で、目の前に薄磯海水浴場がある。豊間中学校は福島県の中学校で唯一、津波に飲みこまれた学校である。小野先生の手記は震災時に学校に残っていた



図1 事前学習風景

生徒の避難から地元住民の救出など、震災から 2 日間の小野先生が経験された生々しい状況が記載されていた。学生はテレビなどの報道でしか東日本大震災の状況を知らなかったが、実際被災された方の手記と写真を見て、大きな衝撃を受けていたように感じた。全員に事前学習の感想レポートを記述させた。我々にとって大変貴重な事前学習となった。

2. 旭労災病院震災派遣事業報告

9/6(木)には事前学習として旭労災病院⁷⁾を尾張旭 RC とともに訪ね、理学療法士の藤代先生から震災の約 1 ヶ月後に労災病院グループが実施した震災派遣事業について、避難所におけるリハビリテーション班の活動の観点から報告を聞かせていただいた。

避難所での生活は十分なプライバシーが保てないため、とくに高齢者は横になっていることが多くなり、下肢の筋力低下が加速し、歩行困難の症状が出始めていた。また、避難所の床は毛布が敷き詰められており、転倒の危険が伴う環境であった。そのため今後、避難所生活が長期化することで更なる体力低下が予想され、住環境の改善やリハビリ・介護関連職種的重要性が高まるとの報告であった。本学も健康福祉学科を開学しているが、災

害時のみならず日常生活における高齢者や障害者のための住環境に関する知識や、体力低下を防止するための予防運動に関する知識など、介護のみならず周辺関連分野も理解していく必要性が本報告により示された。

3. シュッシュ作成 & 菊武夏まつりフリーマーケット

8/25(土)に開催された菊武夏まつりにおいて、例年同様、フリーマーケットを学園本部と共催で実施した。学生がチラシを作成し、学内で教職員と学生から出品物を募集した。事前の値札貼りには KEIEITAN ボランティア隊以外の学生の協力もあり滞りなく完了した。

また、活動旅費の一部に充当するため、シュッシュを学生たちが手作りで作成して菊武夏まつりで販売した。一度購入した家族連れのお客様が気に入ってくださり、再度追加で購入しに来てくださったものの好評で売り切れてしまっていたときには、喜びと申し訳なさで涙をにじませる学生もいた。



図2 東日本復興支援フリーマーケット



図3 手作りシュッシュ販売

4. 先発隊出発

先発隊5名は、9/7(金)に福島県いわき市に向けて出発した。

残暑の残る中での出発となったが、近藤先生が見送りにきてくださった。いわき市へは名古屋からの直行夜行バスはなく、東京での乗り継ぎとなった。いわき駅まで小野先生が迎えに来てくださった。昼食後、震災の津波の被害を受けたいわき市立豊間中学校へ案内していただいた。宿泊は震災被害を受けたいわき湯本温泉の古滝屋のご厚意で学生ボランティアということで格安で宿泊させていただいた。古滝屋さんも被災され、完全に営業できる状態ではなかった。温泉付きの宿に宿泊さ



図4 先発隊出発

せていただき源泉かけ流しの温泉も堪能でき、疲れも癒された。

5. 豊間中学校 & オープンキャンパスでの遠隔地中継

豊間中学校の校庭には瓦礫が山積みのみで校舎と体育館は立ち入り禁止となっており、津波を受けた当時のすさまじい状況が想像できた。周辺は一部解体されずに家屋が残されていたが、草が生い茂り、多くの家はコンクリートの土台だけで、家が建っていたとはとても想像できないような現状であった。集落が一つまるごと津波に飲み込まれていた。また、津波の際に避難した裏山にも登り、手記で読ませていただいたが、当時の状況を事細かに説明して下さった。我々にとっても学生にとっても大変貴重な現地訪問となった。



図5 豊間中学校校庭



図6 豊間中学校体育館



図7 豊間中学校入口



図8 オープンキャンパスでの遠隔地中継

先発隊活動初日の9/8(土)は本学でオープンキャンパスが開催されており、ランチタイムに Skype[®] を利用した遠隔地とのインターネット中継を実施した。通信回線が低速であったため、通話が何度か途切れたり映像が映らなかったりした場面もあったが、オープンキャンパスに参加していた高校生にとってはアンケート結果からも概ね好評であり刺激的であった。

先発隊にとっては、長時間の移動後、当日朝に現地へ到着し疲労が残る中での中継であったが、将来を考えると、インターネットを活用したインタラクティブな情報伝達が必須と

なっていく時代で、今回のような試みを実施できたことは大変意義深いものと考えられる。

6. 中之作プロジェクト

9/9(日)には、いわき市小名浜の中之作で「直してみんかプロジェクト」に参加した。中之作は小名浜の北に位置する古い港町で、津波により壊滅的な被害を受けた地域である。その中之作で、現代にない建築物や古い街並みを残すために古民家の修復活動している団体が中之作プロジェクトである。今回は、震災で津波の被害を受けて解体の危機にあった「清航館」と名付けられた民家を「海に見える厨房付きレンタル古民家」にするための、土壁作りに参加した。



図9 土壁作り



図10 中之作プロジェクト参加

土壁作りは、土、竹、木、ワラのみを使用して、建築当時の工法で作業を行う。粘土やワラ、水を使用して足でこねた土を壁に塗る作業は、女子学生にとっては力仕事で想像以上に大変であったが、いつの間にか疲れや筋肉痛だった事を忘れ、夢中で作業をしていた。この清航館は、3年もの月日をかけて修復される予定で、完成した時には是非また訪れたいと、学生たちは思いを募らせた。

また建築当時の瓦は現在では作られていないため、修復に使う瓦を近所で解体する建物からいただき、瓦の裏側に「200年後の未来に向けたメッセージ」を書く瓦メッセージプロジェクトにも参加し、学生たちは心を込めてメッセージを書き入れた。

日本人は古来より、自然の素材を住まいに取り込み、自然とともに暮らし、自然の力を借りながら生活をしてきた。再利用可能で環境にやさしく、地震に強く、それでいて温かみがあり癒される。このような伝統的な日本家屋の良さを知り、学生たちも先人の知恵と技術に感動していた。次は、彼女らが日本人の誇りを胸に、日本の伝統文化の素晴らしさを後世に伝えていってくれることであろう。

7. 後発隊出発

9/9(日)に、後発隊11名が古橋学長、志水健康福祉学科長の見送りの中、仙台に向けて出発し翌朝に定刻通り到着した。途中で立ち寄ったSAで携帯電話を忘れてくるトラブル

もあったが無事に見つかり、午後に先発隊と、夕刻には尾張旭 RC と合流した。長時間の移動ではあったが疲れも見せず、尾張旭 RC の方々に対して、元気に本活動の意気込みを語っていたのが印象的であった。



図 11 後発隊出発

8. 宮城教育大学学生との意見交換会

後発隊到着初日の午後には宮城県仙台市内で、宮城教育大学の学生 4 名と意見交換会を実施した。彼らの震災当時の状況は、1 人暮らしで入浴中に、家族と一緒に、先輩と一緒に、大会の遠征先である九州で、と四者四様であった。

彼らからは震災当時における被災者の実態を聞くとともに、その実体験から得た数々の教訓を学ぶことができた。これらの内容はテレビや新聞をはじめとするマスメディアからでは知り得ない情報で、参加した学生たちにとって、大変貴重な体験談を聞くことが出来た良い機会であり、自分たちが見聞きしてきた情報はほんのごく一部に過ぎないことを痛感させられた。また、震災当時に宮城教育大学の学生たちが行ってきたボランティア活動を聞き、同年代の学生として「自分たちに何ができるのか」「自分たちは何をすべきなのか」を改めて考えさせられることとなった。

白熱した意見交換会となり、当初予定していた 2 時間では時間が足りず、夜には第二部を開催する運びとなった。



図 12 意見交換会



図 13 宮城教育大学学生 4 名

9. ひまわり集会所訪問

二日目は、尾張旭 RC とともに現地の松島 RC の例会に参加させていただき、その後、尾張旭 RC とともに東松島市内で最大規模の仮設住宅にあるひまわり集会所を訪問した。道中、移動車が道に迷ったがそれによって未だ被害の爪痕が残る地域を目の当たりにする

こととなった。

ひまわり集会所に到着すると震災の発生時刻（14時46分）と重なり、発生からちょうど1年半後（9月11日）であったことから皆で黙祷を捧げた。現在でも、現地の地方紙^[9]では毎月11日には防災特集が組まれており、防災意識を高め震災を風化させない努力が続けられている。

集会所入り口にはボランティアからいただいた多くの花が並べられていた。しかし、花を見て心は和むが空腹は満たされない、お金は得られない、と涙ながらに仮設住宅の代表が語られた。震災直後は全国から募金や支援の手が差しのべられたが、日が経つにつれ、マスメディアで報道される機会も減り、我々の意識からも薄れていってしまう。多忙な日々の中、我々は震災のことを、被災者のことを思い出し、ともに「がんばろう」と絆を深め、復興を願う子どもたち^[10]に希望の光を照らしていかなければならない。



図 14 被災した住宅



図 15 ひまわり集会所



図 16 仮設住宅訪問

当日、集会所内では音楽教室が開催されており、学生も一緒に参加して楽器の演奏を楽しませていただいた。音楽を通して住民が癒されるのはもちろんのこと、将来は演奏会を開催し収入を得るといった自立に向けた取り組みであった。老子の言葉に「授人以魚 不如授人以魚」という言葉がある。もらった魚は食べてしまえば一日で終わってしまうが、魚の釣り方を知れば他人に頼ることなく魚を得ることができる。継続的な支援も重要であるが、それと同時に今後は被災者の自立支援が重要性を増してくる。

10. 松島第二幼稚園見学

最終日には松島第二幼稚園を訪問した。震災時の園の様子を伺った後、実際に行われているコーディネーショントレーニング^[11]を見学させていただいた。

松島第二幼稚園は幸いにも直接的な被害は無かったものの、急激な環境の変化と過度のストレスが子どもに及ぼした影響は大きく、将来の保育士や幼稚園教諭を志す子ども学科の学生にとっては大いに考えさせられる内容で、彼らは卒業までに何を学び、何を身に付けなければならないかを再認識させられた。



図 17 コーディネーショントレーニング風景

日常はもとより災害時における体力や運動能力が、自らの身を守る上で非常に重要であることが今回の災害でより明確となったことで、それらの発達を促すコーディネーショントレーニングの必要性および、指導可能な保育士・幼稚園教諭が市場で求められている。そのため本学においては、3年制の長期教育の特徴を活かし、コーディネーショントレーニングをはじめとする運動能力育成を指導可能なカリキュラムや教育体制の構築が急務と

考えられる。このトレーニングは、幼児期のみならず、児童期から高齢者、障害者、アスリートにおいても有効とされている^[12]。愛知県教育委員会では、小学校における体づくり運動の多様な動きを作る運動遊びに取り入れている^[13]。よって、ライフサイクルに関わる人材育成を行っている本学では、今後より一層取り組んでいくことが望まれる。

11. 菊華高校文化祭 & オープンキャンパスでの活動報告

9/28(金)に、KEIEITAN ボランティア隊から総合ビジネス学科の2年生2名を連れて菊華高校^[14]の文化祭に参加した。そちらでは菊武夏まつりで好評であった手作りシュシュを高校生と一緒に作成をした。

オープンキャンパスでは何度も顔を合わせている生徒も、文化祭という違った環境では新鮮で、高校での様子も伺うことができた。姉妹校のため本学へ入学予定の生徒も多く、このように入学前から学生と触れあえる機会を増やさねばならない。



図 18 菊華高校文化祭でのシュシュ作成



図 19 オープンキャンパスでの活動報告

また、11/10(土)のオープンキャンパスでは、KEIEITAN ボランティア隊に参加した健康福祉学科の1年生がランチタイムに活動報告を行った。翌週に開催されるボランティア報告会の発表練習を兼ねていたとはいえ、堂々とした発表を行った。多くの講義内で発表やプレゼンテーションを指導しているが、学内の人間だけでなく今回のように初対面の人たちに対して、いかにして自分の思いと想いを伝えることが出来るかが、社会に出てから問われてくる。そのため、実践の場を多く経験させ「発想・表現・伝達」のスキルを身につけてさせることが必要である。加えて、今回は A1 サイズで活動報告のポスターを学生が作成し展示も実施した。

12. ボランティア報告会

11/17(土)に、尾張旭 RC と共催でボランティア報告会を実施した。生憎の天気ではあったが、多数の方にお集まりいただいた中、学生たちが報告を行った。尾張旭 RC からは、長期に渡りボランティア活動を実施されている会員が、生々しいボランティア活動の実状を報告され、様々な感情が込み上げてくる印象深い内容であった。旭労災病院からは、事前学習でお話を伺った藤代先生だけでなく薬剤師の丹羽先生も登壇され、災害派遣報告を行っていただいた。各々、リハビリ班と医療班の両面から、ボランティア活動における各方面との連携の重要性と、災害後の時期に応じた活動の必要性を述べられた。



図 20 ボランティア報告会

KEIEITAN ボランティア隊は学科学年で 4 グループに分かれて報告を行った。時系列順に総合ビジネス学科 1 年生が福島県での古民家修復活動について、健康福祉学科の学生が宮城教育大学生との意見交換会について、総合ビジネス学科 2 年生が仮設住宅の訪問について、子ども学科の学生が松島第二幼稚園の見学について、それぞれ報告し、それまでの発表練習の成果を披露した。

この報告会は本ボランティア活動の集大成であり、発表資料を作成しながら、学生らは現地で見聞きしたことを思い返していた。本報告会で学生が発表していたように、マスメディアで報道されていることだけでなく、自分で見聞きすること、自分で調べることで、多くの知見を得られたものと思う。次項のクリスマスプレゼント作成についても、仮設住宅で募集していることを学生たちが調べ、自ら提案してきた企画である。今後の就職活動においても、情報収集能力を活かして自分たちの夢を掴んでくれることを祈る。

本報告会の様子は Facebook^[15] でリアルタイムに情報発信を実施した。本学では、今年度から Facebook をはじめとする SNS (Social Networking Service) を用いた広報活動への利用と、学生への活用教育に注力しており^[16]、実践する良い機会となった。今後も本

学での行事やイベントを即時に情報発信していくことで、広報活動における本学の更なる認知向上が望まれる。

13. クリスマスプレゼント作成

12/6(木)には、総合ビジネス学科と子ども学科の2学科で基礎ゼミを開学後初めて合同で実施し、ひまわり集会所の子どもたちに向けたクリスマスプレゼントを作成した。極力お金をかけず、学生一人ひとりが手作りで出来るという学生ならではの趣向で、タオルを使用した手作りのクリスマスブーツを作成することとなった。



図 21 クリスマスブーツ作成

まずは、活動の趣旨を学生に理解してもらうため、KEIEITAN ボランティア隊の学生たちから活動報告が行われた。時間割の都合上、健康福祉学科は合同ゼミに参加できなかったが、たまたま KEIEITAN ボランティア隊のメンバーで時間が空いていた健康福祉学科の学生も活動報告をしてもらうことができた。KEIEITAN ボランティア隊メンバーの総合ビジネス学科2年生についても同様に自ゼミ終了後、帰宅せずに残って本活動に参加してもらうことができた。本活動は KEIEITAN ボランティア計画当初には予定されていなかった活動であり、何ら強制できるものではなかったが、学生たち自ら協力してくれたことに感謝し、ボランティア精神が養われたことに対する成長を喜びたい。

ひまわり集会所で暮らす子どもたち76名に対して思いを一つにし、2学科の1年生が学科の枠を越えて心を込めたプレゼントを作成でき、非常に有意義な合同ゼミとなった。また、教員側にとっても初めての合同ゼミということで、準備が行き届かない点が見られ反省点も多く挙げられるが、今後も学科を越えた活動は継続的に実施していくべき事項であろう。

14. 学会発表

1/5(土)日本ビジネス実務学会 平成24年度中部ブロック研究会^[17]が本学にて開催され、学生プレゼンテーション・コンテストにおいて、総合ビジネス学科1年代田明日香が優秀賞、同1年菅沼賀代、早川結衣(発表者は菅沼)が奨励賞をそれぞれ受賞した。



図 22 優秀賞と奨励賞を受賞

登壇した兩名はともに初めての学会発表であったが、それまでの幾度かの報告会の経験を活かし素晴らしい発表を行った。代田は惜

しくも最優秀賞は逃したが、僅差の接戦で甲乙つけがたい出来であったとの評価をいただいた。また、菅沼については、途中機械トラブルに見舞われ残念な結果となってしまったが、内容については遜色の無い出来であった。

短大生で学会発表をすることは貴重な経験であり、参加した他学の学生と触れあえたことは参加した3名の学生にとっては今後の就職活動において大いなる刺激となったであろう。今回の他者の発表はビジネスインターンシップでの内容が大半を占め、彼女らの発表から得られることも多く、自身らを省み成長の糧となることを願うばかりである。

IV. ボランティア活動を終えて

今回の KEIEITAN ボランティア隊は引率教員含め総勢 16 名と、大所帯での活動となった。これだけの人数が、先発隊出発から数えて 1 週間近くもの期間に渡りボランティア活動を実施できたことは、関係各所の多大なるご支援と甚大なるご協力の賜物であり、感謝の気持ちで心が溢れている。月並みな言葉ではあるが学生共々、普段はできない数々の貴重な経験を積むことができ、非常に多くのことを考えさせられた。

一般的にボランティア活動は、個人の自由意思に基づき、その技能や時間等を進んで提供し、社会に貢献することであり、ボランティア活動の基本的理念は、自発性、無償性、公共性、先駆性にあると考えられており^[18]、国語辞書においても「自主的に社会事業などに参加し、無償の奉仕活動をする人」とされている^[19]。しかし現実には報酬の有無のみならず、金額の多寡によらず金銭的負担といった話題はついて回る。そのような意味においても、本活動に参加してくれた学生たちにとっては、人間の社会活動における現実を知る良い機会ともなった。本活動にかけた費用をそのまま募金という形で提供することも復興支援の一つの手段と考えられるであろう。しかし、それよりも本活動を通じて我々は、自分たちが見聞きした経験、知り得た知見や情報を、社会へ還元することこそがボランティア活動の本質であると体感すると同時に、同行した学生たちも同様に感じ、数多くの報告の場を通して自発的に実践してくれたことに大いなる喜びを感じている。内閣府の国民生活選好度調査ではボランティア活動を「仕事、学業とは別に地域や社会のために時間や労力、知識、技能などを提供する活動」と定義している^[20]。今回参加してくれた学生だけでなく、彼女らの活動報告を聞いた学生たちも含めて、本学を卒業し社会に出た際には、様々な形で社会へ貢献をしてくれることを切に願う。

本活動の目的である「将来発生すると言われる東海大地震への備え」については、学生たちが各所で報告をしたように、個々の活動から多くの知見を見に付けてくれた。彼女らは今後も、これらを忘れることなく日々の生活を送るとともに、自身たちが報告をしたように、「風化させることなく」周囲へ伝える努力を継続してくれるものと感じている。そして、それを続けることこそが、本活動を支えてくれた多くの方々への最大の恩返しにな

ると考えている。

今回は3学科それぞれから学生が参加してくれ、3学科の各教員からもカンパという形でご支援をいただきました。本活動を機に学科の枠を越えた合同のゼミを初めて開催することもできた。個人的にも他学科の講義に参加させていただく機会を得た。本学としてもこれまで、広報活動、学生教育、就職支援、など様々な場面において3学科で連携を図ってきたが、本活動を通して更に3学科の距離を縮めることができた実感している。今回引率をした我々は3学科それぞれにおいて講義を担当しているが、今後は学科ごとの講義担当有無によらず各学科の学生たちと交流を図り、全教員が全学科の学生と接する機会を持つことこそが真の愛情教育に繋がるものとする。

謝辞

今回の震災復興ボランティア実施にあたり、多大なご協力とご支援をいただきました尾張旭ロータリークラブの皆様に対して感謝いたします。また、学生を快く受け入れてくださった、小野覚久先生、古滝屋、中之作プロジェクト、宮城教育大学学生、ひまわり集会所、松島第二幼稚園の関係者の皆様方に対しましても感謝いたします。記して謝意を表わす次第です。

カンパにご協力いただきました諸先生方（順不同、敬称略）

名古屋経営短期大学

古橋エツ子

健康福祉学科：志水暎子、高木清秀、上田智子、中尾治子、三好禎之、井川淳史、

藤田委子

子ども学科：栗山陽子、浅野里美、佐々木俊郎、陳惠貞、平岩定法、江村和彦、

武藤大司、渡邊さらさ、勝田みな、松山有美、藤林清仁

総合ビジネス学科：田淵哲明、渡部琢也、近藤城史

名古屋産業大学

環境情報ビジネス学部 環境情報ビジネス学科：巢宇燕、星野雪子

活動に参加した学生

名古屋経営短期大学

総合ビジネス学科2年：河村真依、津隈奈緒美

健康福祉学科1年：荻野郁美、小田萌乃、佐藤あゆみ、千田汐里、

竹本麻里奈、平岡唯

子ども学科1年：武田健栄、辻直寛、牧村阿依

総合ビジネス学科1年：代田明日香、菅沼賀代、早川結衣

引用文献

- [1] 「尾張旭ロータリークラブ」〈<http://www5b.biglobe.ne.jp/~owariasu/>〉（参照 2013-02-20）
- [2] 「学校法人菊武学園 名古屋経営短期大学 KEIETAN ボランティア隊」〈http://www.jc.nagoya-su.ac.jp/?page_id=222〉（参照 2013-02-20）
- [3] 「ひまわり集会所」〈<http://himawarishukaijo.jimdo.com/>〉（参照 2013-02-20）
- [4] 「福島温泉 ホテル絶景の館」〈<http://zekkei.jp/>〉（参照 2013-02-20）
- [5] 「中之作プロジェクト ホームページ」〈<http://toyorder.p1.bindsite.jp/nakanosaku/>〉（参照 2013-02-20）
- [6] 「福島県いわき湯本温泉 古滝屋」〈<http://www.furutakiya.com/>〉（参照 2013-02-20）
- [7] 「独立行政法人労働者健康福祉機構 旭労災病院」〈<http://www.asahih.rofuku.go.jp/>〉（参照 2013-02-20）
- [8] 「Skype」〈<http://www.skype.com/ja/>〉（参照 2013-02-20）
- [9] 「河北新報 コルネット むすび塾 防災・減災のページ」〈<http://www.kahoku.co.jp/spe/bousai/>〉（参照 2013-02-20）
- [10] あの日のわたし編集委員会編『あの日のわたし』創栄出版 2011 年
- [11] 荒木秀夫『コーディネーション運動 トレーニング実践へのガイド』財団法人健康・体力づくり事業財団
- [12] 伊藤秀樹・渡部琢也編著『21 世紀の生活福祉・援助分析論』大学図書出版 2008 年
- [13] 愛知県教育委員会子どもの体力向上支援委員会著『多様な動きをつくる運動（遊び）』愛知県教育委員会 2011 年
- [14] 「学校法人菊武学園 菊華高等学校」〈<http://www.kikuka.ed.jp/>〉（参照 2013-02-20）
- [15] 「Facebook」〈<https://ja-jp.facebook.com/>〉（参照 2013-02-20）
- [16] 渡部琢也・近藤城史・田淵哲明著『短期大学生におけるスマートフォンの使用状況に関する意識調査』名古屋経営短期大学紀要 2013 年
- [17] 「日本ビジネス実務学会 中部ブロック研究会」〈<http://www.b-jitsumu.com/Block/03/>〉（参照 2013-02-20）
- [18] 「文部科学省 生涯学習審議会「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について（答申）」の送付について」〈http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19920803001/t19920803001.html〉（参照 2013-02-20）
- [19] 松村明監修 小学館国語辞典編集部編著『大辞泉』小学館
- [20] 「内閣府 平成 12 年度国民生活選好度調査」〈<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/senkoudo/2000/1221c-senkoudo-s.pdf>〉（参照 2013-02-20）